

特派員メモ

心の傷は消さない

◆ソウル

東日本大震災から3年。あの時の記憶は、震災時に被災地に駆けつけた韓国の消防士の間でも語り継がれている。

被災地には当時、海外から17カ国・地域の救助チームが向かった。韓国は発生翌日にいち早く先遣隊を送り、隊員107人と救助犬2匹を派遣。福島第一原発の事故で他国が撤収しても活動を続け、18人の遺体を発見した。

韓国消防防災庁中央1119救助本部の黄載東・現場指揮チーム長(48)は当時、3チームのうち1チームの指揮を任された。仙台市の現場に着いたのは3月14日朝。テントでの仮眠で捜索を続けた。車の運転席に背を伸ばす人影を見つけたが、男性はギアを握ったまま息絶えていた。屋上で女性の遺体を見つけた校舎には無数のランドセルが残っていた。「子供たちはどうなったんだ」と胸が詰まった。

帰国後、隊員数人がPTSD(心的外傷後ストレス障害)と診断された。黄チーム長も今なお夢にうなされる。が、あの時を若い同僚らに伝えてもいる。「最善は尽くしたが、生存者を見つけられなかったのが今でも心残りです」。消防士としてこの傷は消してはいけないと思う。(中野晃)